

芸北 草地シンポジウム 草地がつなぐ人・文化・いのち ーシンポジウムと千町原保全活動の記録ー

白川勝信

高原の自然館

Proceedings of the Symposium on Grasslands with Human, Culture and Life in Geihoku

Katsunobu SHIRAKAWA

Natural Museum of Geihoku, 119-1 Higashi-Yahatahara, Kitahiroshima-cho, Hiroshima 731-2551

Abstract : It is said that the grassland has decreased in Japan from 10 % to 3 % during the last century. In the background, there is a change in the agricultural sector from oxen to tractors or from compost to the chemical fertilizers, as well as a change in the energy use from firewood to fossil fuels. The change of grasslands has affected ecosystem. Geihoku is an important region where the grassland has comparatively remained, in Hiroshima Prefecture.

This is a summary report of the symposium "Grasslands with Human, Culture and Life in Geihoku" as well as workshops held from November 19 to 20, 2005. At the end of the report, the outcome of the questionnaire submitted by the participants is attached.

©2007 Kitahiroshima-cho Board of Education, All rights reserved.

はじめに

かつて国土の1割を占めていた草地が、今日ではわずか3%にまで減少したと言われている。その背景には、牛馬からトラクターへ、堆肥から化学肥料へといった農業形態の変化や、薪から化石燃料へのエネルギー利用の変化がある。こうした人間活動の変化によって失われた草地では、すみかを奪われた動植物に変化が生じている。芸北は広島県の中でも比較的まとまった草地が残る重要な地域である。

本報告は2005年11月19日に開催された「芸北 草地シンポジウムー草地がつなぐ人・文化・いのちー」における講演内容および座談会の内容をまとめたものである。また、報告の最後にはシンポジウムおよび翌日の関連行事に参加した参加者へのアンケートの集計を付した。

芸北草地シンポジウム ー草地がつなぐ人・文化・いのちー

主 催：八幡高原ふるさと推進協議会・雲月地区ふるさと推進協議会
協 力：西中国山地自然史研究会・芸北観光協会・芸北文化ホール・高原の自然館
日 時：2005年11月19日（土）13:00～17:00
場 所：芸北文化ホール
参加費：無料

13:00 開会（川内忠信；八幡高原ふるさと推進協議会 会長）

13:10 基調講演

中越信和（広島大学教授）：芸北の自然と人の関わり

13:50 一般講演

上野吉雄（広島県立原養護学校 教諭）：芸北の草地に生きる鳥類

高橋佳孝（近畿中国四国農業研究センター主任研究官）：
草原の再生－保全から活用へ－

宮本裕之（雲月山活性化委員会事務局，北広島町議会議員）：雲月山の山焼き

川内信忠（八幡高原ふるさと推進協議会 会長）：千町原の保全を目指して

16:00 グループ座談会（コーディネーター：白川勝信；高原の自然館）

17:00 閉会（藤澤 通；雲月地区ふるさと推進協議会 会長）

18:00 地域住民・講師と語り合う懇親会（会場：八幡高原センター）

司会：近藤紘史（芸北観光協会 会長，西中国山地自然史研究会 会長）

関連行事：千町原の草原維持作業

日 時：2005年11月20日 9:30～17:00
場 所：広島県北広島町東八幡原千町原
参加費：500円

.....

基調講演：芸北の自然と人の関わり

広島大学大学院 国際協力研究科
中越信和



1972年6月10日に、生態学の実習のために臥竜山に登った時、山頂から遠くに広葉樹林を切り開いている様子が見られました。おそらく針葉樹を植林するためだったのでしょう。翌日は水面の広がった長者原の湿原に行きました。今では水面のある湿原は減っていますが、当時はあちこちにずいぶん見られました。その時宿泊したよもぎ旅館は、現在は造り替えられています。先日、そこで宿泊台帳を見せていただくと「鈴木兵二先生一行」の文字が確認できました。

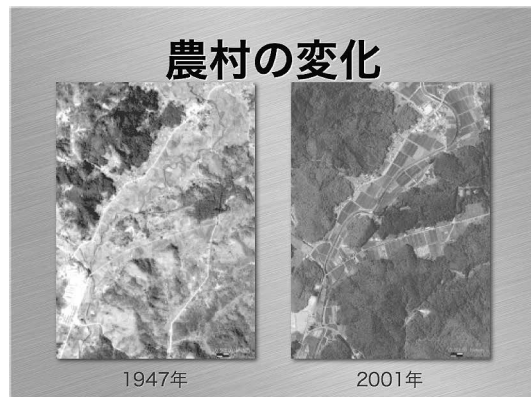
私が実習に行って目にしたとおり、多くの広葉樹林は失われてしまいましたが、芸北には現在でも臥竜山のブナ林など超一級の自然が残されています。その一方で、人間との関わり合いの中で生活しているものもあり、結果として原生林から水田まで幅広い生態系を作り出しています。その中の一つに、農業という人の営みが作り上げた二次草地があります。そこには、カワラナデシコやノカンゾウなど、特有の植物が多く見られます。ところが、草刈りが行なわれなくなったことや、牧草を播いたことなどにより、二次草地は急速に失われようとしています。1947年に撮られた写真を見ると、集落の周りには草地がたくさんありますが、2001年には

森林化が進んだことがわかります。

原生の森林や草原などを含め、日本の景観を作ってきた文化を考えると次の4つが挙げられます。一つめは縄文文化、すなわち狩猟採集の文化です。今日では縮小しているものの、存在意義は消滅していません。その次に現れるのは弥生文化です。弥生文化は照葉樹林帯で育まれた稲作に伴う文化です。これは現在までずっと継承され、おそらく日本の隅々まで伝わっていると見て良いでしょう。弥生時代以降、日本人の主たる生業である稲作は、照葉樹林帯で行われていました。これに対し、落葉樹林帯、すなわち温帯では炭の生産など燃料の採取が行われていました。継続的に燃料を生産するためには、森林を破壊するのではなく、利用しながら維持することが必要であり、それが行われてきたのです。

それ以外の二つの文化は、北海道中心のアイヌ文化と、南西諸島の琉球文化です。アイヌ文化については、今日、北海道の景観の中にその痕跡を見つけることが困難で、北海道に見られるのは明治以降の開墾に伴う農業景観です。これは非常に残念なことだと思います。沖縄は「うたき」を伴う宗教的な景観を形成してきましたが、本土中心の文化的景観の範疇で宗教を伴う文化を保全することは容易ではありません。しかし、琉球文化も重要な一つであることは間違いありません。

広島県は暖帯と温帯の二つの気候帯を持ち、



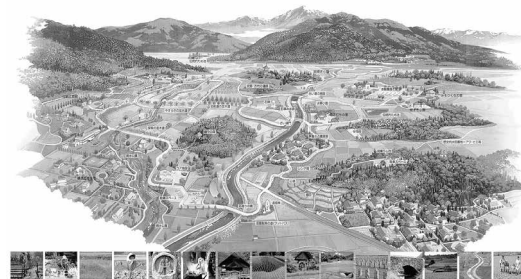
それらが接しています。常緑樹がたくさんあってイネがよくできる文化と、かつてはイネが作られなかった文化圏です。つまり、海側に弥生文化、山側に縄文文化が発達していたと見ることができます。これらの文化圏は対等ではなく、人間の活動は、海側から山に向かって開発という形で影響を及ぼしてきました。しかし、気候的な制約から、温帯には稲作による乱暴な農村開発が行われませんでした。その結果、芸北にはブナ林や湿原などの原生植生が必然的に多く残されたと見ることができます。視点を変えてみると、芸北のような山側は、様々な物を供給する場として機能してきたとも言えます。炭はその主たるもので、たたら製鉄の時代、芸北は炭の大産地でした。あるいは、牛馬の生産地でもあります。平安時代には中国山地では牛を生産していました。牛は南方系の家畜ですが、畜力としてこれが必要であり、その主たる生産地は温帯域でした。その後、源平の時代になると、各地で起きる紛争に対応するように馬が飼育されていきました。中国山地もその例外ではありません。芸北もごく最近までこうした縄文文化圏でしたが、戦後になって農業技術が急速に向上し、弥生文化圏的な農業地帯へと変容を遂げました。同じような変化は東北地方など本州の北部にまで及び、現在では北海道の石狩平野でも米が作られています。

ところが、さらに大きな変化が起きています。かつて人々の生活は様々な地域に分散して営まれていましたが、今日では都市のみに人口が集中し、都市文化が台頭するとともに農村文化が失われつつあります。これに伴い、農村の景観も失われつつあります。農村の文化や景観こそ、風土に密着した固有の文化であったはずなのに、今日の社会においてはそれを守る仕組みが確立されておらず、大きな問題が生じているのです。人と文化の変容は、野生生物にも影響を及ぼしています。人が利用してきた農地や里

山には、そこに特有の生物が生息していました。その最も象徴的なものの一つが草地の植物や昆虫です。また、稲作文化の影響が及ばなかった湿原や、ブナ林などの原生林も、大規模な開発により破壊が進みました。

こうした時代背景のなか、芸北町の第3期長期計画の中で全町自然博物館構想が立てられました。同時に、ふるさと自慢運動という、各地区の様々な活動が自然も視野に入れた中で進められ、全町自然史博物館構想の中に盛り込まれました。この構想は、最終的には田園空間博物館という名称で農林水産省の事業に採択され、その結果、町内には様々な施設が作られました。中心となるのは、川小田地区のオークガーデンであり、ここと各地区のサテライト施設とを結んでいく計画となりました。美和西部地区には清流の家、美和東地区には美和東文化センターが、それぞれ閉校となった小学校校舎を活用して建設されました。八幡地区には「芸北 高原の自然館」として山麓庵と高原の自然館が建てられました。山麓庵は、当初、樽床にある国の指定文化財である清水庵を移設する計画でしたが、財政的な理由から、新築の民家を設計・建築しました。教育委員会が管理する高原の自然館では、芸北の自然について様々なことを勉強できます。中に入って物を見るのではなく、外で勉強したことを確認したり、どこに行けば良いかという情報を得るための施設です。よく間違われますが、ここでは博物館はあくまでも野外にあ

田園空間博物館構想



るのです。旧芸北町全体が博物館であり、自然がそのまま展示物なのです。

今回は、草地からの視点で、人・文化・いのちについて考えるシンポジウムです。これらは、時代とともに常に変化していますが、北広島町においてこのシンポジウムが開催されることの意義は非常に大きく、また、北広島町でなければ開催できないものだと考えます。

その理由の一つは、西中国自然史研究会からスタートしている、「高原の自然史」を中心とするような学術的な調査と、研究対象となるすばらしい自然があることです。高原の自然史はこれまでに11号が発行されましたが、その成果は多岐にわたり、今後も続けられることでしょう。二つ目は北広島町の農業景観です。単なる農業地帯というだけでなく、田園空間博物館に採択されたようにすばらしい農業景観を持っているということです。荒れた水田も多少見受けられますが、適切な整備が行われれば日本の代表に足りうる潜在的な力があると思います。最後の理由は自然再生事業という官民連携で行われている事業があることです。この事業は、もとは住民やボランティアの取り組みであったものが、環境省の助言のもと広島県の事業として採択されました。自然再生事業は住民と行政、双方の協力があって初めてうまくいく事業です。八幡で行われている自然再生事業は、開発の反省から生まれた事業ですが、草地についてもそうした取り組みが必要かもしれません。

これら自然研究、農村整備、自然再生の三つを同時に実現している場所というのは希です。今こそ、人・文化それに加えて野生生物のいのちが継続的に保たれる方法をこの場において考える時なのです。

芸北の草原性鳥類について

広島県立廿日市養護学校
上野吉雄



近年、草原性鳥類の減少が問題になっています。たとえば、北海道において、15年まえからシマアオジが減少しています。これは越冬地の環境悪化や中継地である中国での問題があるなどと言われていますが、シマアオジが繁殖していた牧草地で、かつては牧草の刈り取りが7月中旬から8月上旬に行われていたものが、1970年代からは青草刈りとして6月から行われるようになりました。このため、シマアオジをはじめとした牧草地で繁殖していた鳥類が、繁殖期である6月に草刈のために繁殖に失敗するようになりました。北海道ではこれらの草原性鳥類の繁殖地として河川敷に注目して、草原性鳥類の保護に取り組んでいます。

芸北地区においては、オオジシギというシギの仲間が千町原や俵原牧場に夏鳥としてやってきていました。これは、ハトくらいの高さのシギで、主として本州北部、北海道、国後島などで繁殖し、オーストラリア東部、タスマニアなどに渡り越冬していますが、近年その数が減少しているため、環境省により準絶滅危惧種に、広島県により絶滅危惧種に指定されています。少数のものは西日本でも繁殖することが知られており、県内では千

町原と俵原牧場に少数のものが渡来していましたが、千町原には近年渡来せず、俵原牧場が県内における確実な繁殖地となっていました。しかし、1995年を最後に渡来しなくなりました。

次に、ホオアカですが、県内では少数のものが局地的に夏鳥として渡来していましたが、芸北地区では千町原と俵原牧場に少数のものが渡来していましたが、千町原では1990年を最後に確認されていません。県内でホオアカが確実に繁殖していたのは、俵原牧場だけなので広島県が希少種に指定していました。しかし、1995年ころを最後に渡来しなくなりました。1993年と1994年に繁殖状況を調査しましたが、牧草の中に営巣しており、刈り取りによって失敗することがありました。そのため、1995年以来渡来しなくなったものと思われます。したがって、県内では現在のところ確実な繁殖地はなくなってしまいました。近隣では、山口県の秋吉台や阿知須、島根県では益田市や浜田市の牧場や農耕地で繁殖しているので、千町原を草丈の低い草原にもどしてやると帰ってくる可能性が一番高い草原性鳥類だといえるでしょう。

キジは千町原の土嶽がいまのように樹林化するまでは、ここで営巣しているものも観察されていました。

セッカは現在も俵原牧場などで繁殖してい



オオジシギの雛

ますが、千町原を草丈の低い草原にもどしてやると

やると帰ってくると思われます。

モズも牧場などの草丈の低い草原でバッタなどの餌を探す鳥で、近年そのような環境の減少にともない、個体数が減っています。やはり、千町原の土嶽がまだ草原状の時期には複数の繁殖つがいが見られました。

ヒバリは草丈の低い草原で繁殖する鳥ですが、草原環境の減少とともに個体数も少なくなっています。芸北地区では牧場やスキー場などで少数のものが繁殖しています。

4月に雲月山の山焼きをしました。その後の調査で沢山のハタネズミのトンネルが見つかりました。ハタネズミは農耕地や牧場、草原などの開けた環境に生息する野ネズミです。このネズミを餌とする猛禽類も草原環境がもどってくると狩場として利用します。

ノスリは本州中部以北で繁殖する猛禽類で、県内には冬鳥としてやってきます。芸北地区では滝の平牧場、俵原牧場、枕牧場、千町原などで見られます。

ハイタカも本州中部以北で繁殖する猛禽類で、県内では冬鳥としてやってきます。餌はカシラダカやアトリ、ホオジロなどの小鳥類で、これらの小鳥の多い草原環境で狩りをします。芸北地区では、滝の平牧場や西八幡原の水田、千町原などの開けた環境で見られます。千町原の土嶽での鳥類調査でも確認されています。千町原が広い草原になれば、個体



雛に餌をはこぶホオアカ(雄)

数が増えるでしょう。

撮影：保井 浩

ハイイロチュウヒは中国東北部やロシアで繁殖し、日本に冬鳥として渡来します。農耕地や草原に住み、ハタネズミなどの野ネズミや小鳥を餌としており、芸北地区では滝の平牧場や西八幡原で見られます。やはり、千町原が広い草原になれば、個体数が増えるでしょう。

コミミズクは中国東北部からロシアで繁殖し、日本に冬鳥として渡来します。牧場や広い農耕地に住み、ハタネズミなどの野ネズミを餌にします。芸北地区では千町原や俵原牧場で確認されていますが、近年は見られなくなりました。千町原の草原が広くなれば帰ってくるでしょう。

以上、近年減少の一途をたどっている草原性鳥類と、草原を狩場として利用している猛禽類について述べました。千町原と雲月山をこれらの鳥類の復活の実験場として位置付けて計画的に整備し、草原性鳥類の楽園になる日を夢見ています。



撮影：小柴正記

.....
生物多様性保全に向けた草原の活用へ
～草の使い回し(循環)がキーワード～

(独) 近畿中国四国農業研究センター

高橋佳孝



日本の草地の多くは、人々の農林業の営みによって維持・管理されてきた二次草地(半自然草地)です。ススキ、ネザサ、シバなどが優占する草本群落は、森林国である我が国では希な景観と思われがちですが、昔からどこの農村でもカヤ場や草刈り場はあったし、農業や生活をする上で欠かせない存在でした。

ススキ草地は万葉時代の詩歌にも詠まれているように、屋根ふきや炭俵づくり用のカヤ場、あるいは牛馬の飼料や肥料用の草を刈るための採草地として使われてきました。また、奈良時代には「牧(まき)」と呼ばれる牛馬の放牧場が全国各地に広がっていたといわれ、つい最近までシバやネザサの草地として美しい風景を醸し出してきました。しかし、日本の草地が全くの自然のものではないことを、また、どうして存在してきたのかを知る人は意外に少ないのではないのでしょうか。

雨が多く温暖な日本では、草地は放っておけば森林になるのが自然の姿です。人々は農業や生活のために草を利用することで、森林へと遷移するところを途中の状態(半自然草地)にとどめてきました。早春の野焼きによって、草刈りや放牧の障害となる低木類の繁茂を防が

れ、火に強く地下茎の発達したイネ科草本の比率が高まります。春から秋にかけて牛馬を放牧し、秋には草を刈って冬の飼料や畜舎の敷き草にし、出来た厩肥（きゅうひ）は田畑の肥やしになりました。このような営みが延々と繰り返され、草地は農業と有機的につながり、人と牛、馬に守られてきたのです。

また、草地の明るい環境は、丈の低い草本植物の生育を可能にし、森林とは異なる豊かな植物群集を創り上げました。火入れや採草、放牧などによって植物間の競争が緩和されることで、特定の種による資源の独占が妨げられ、たくさんの植物が生育できたのです。

草地の生物の中には、歴史の証人として重要なものがあります。たとえば、満鮮要素と呼ばれる中国東北部を起源とする多年生草本の仲間、大陸と陸続きだった寒冷な時代に朝鮮半島から日本列島にわたってきた植物たちの名残です。彼らはその後温暖化して森林が発達しても、西日本の火山灰地域の草原を足がかりとして、里山の草地や二次林の環境に生活の場を求めて生き延びたと考えられています。これらの生き物の存在は地域の自然史の謎を解く材料としてとても貴重なものです。

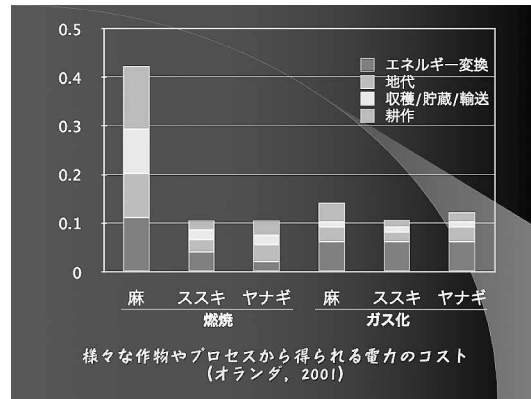
かつては水田よりも広い面積だったといわれる草地ですが、今では本当にわずかになってしまいました。宅地や農地へ転用されたこと、植林されたこと、外来牧草により人工草地に変えられたことなどが原因だとされていますが、生

活習慣が様変わりし、人による干渉がなくなったことも大きな問題です。草地から人間が手をひけば、絶妙に釣り合いを保ってきた「自然の力」と「人間の活動」のバランスは崩壊し、荒れ地や低木林へと遷移していきます。それは、すみやかに、人目をはばかることなく、着々と進行しているのです。

そして、草地に生きる生物たちは危機的な状況におかれるはめになってしまいました。採草や火入れ、放牧が行われなくなったことで、かつてはどこでも見られた草地の生き物たちが急速に消えつつあるのです。植物種のレッドデータブックをみても、オキナグサやフジバカマ、キスミレ、ヒゴタイなどの植物が全国的に減少していることが分かります。「秋の七草」として親しまれてきたキキョウでさえも、河川敷やカヤ場など自生の草地が開発や放置によって消滅したために、絶滅危惧種に名を連ねてしまいました。

また、植物だけでなく小動物や昆虫の生息環境としての役割も機能しなくなってきました。例えば、現在我が国で絶滅に瀕している昆虫には、オオウラギンヒョウモン、ウスイロヒョウモンモドキ、オオルリシジミなど草原性のチョウ類が数多く含まれており、いずれも採草、放牧の中止や土地利用の変化による草地の変質・消失が衰亡の原因となっています。

しかし、近年になって草原や里山こそが「サステイナブル・ユース（持続的利用）」の典型



ではないのかと、新しい観点から再評価されつつあります。資源を使い尽くす近代農法とは異なり、土地や自然をゆるやかに利用しながら、豊かな生態系を展開できる。そして何よりも、草地は適切に利用するなら繰り返し利用できる「持続的に利用可能な」自然であり、利用することで地域の自然や文化が保全できる、という論理は魅力的で、共感を呼びます。

農業や畜産の分野では、これまで放ったらかしにしてきた野草や野草地（半自然草地）の価値が見直され、資本投資を必要としない軽装備で低コストの地域資源として、再び脚光を浴びています。また、有機農業や環境保全型農業が見直されるなか、高品質な野菜、花卉生産農家にとっては、刈り取ったススキの茎葉は有機肥料源として土地づくりに不可欠な材料になるというので、地域内流通も行われています。さらに、伝統的建造物の資材としてのカヤの不足から、カヤ場を復活させ、質の良いカヤの生産を地元産業として育成しようという試みもみられます。高い生産量を誇るススキなどの長大草本については、木質系資材と同様にバイオマス利用への関心も高まってきました。

しかも、その持続的な利用・管理のノウハウは、私たちの祖先が築き上げた草地や里山の技術や文化の中にあります。今ならまだ、その伝統の知恵を学ぶことができますが、あと数年もすれば消滅しかねません。私たちに残された時間は少ないのです。

雲月山の山焼き

雲月山活性化委員会、北広島町議会議員
宮本裕之



雲月山では、今年（2005年）4月8日、地域住民・ボランティアが一緒になり、6年ぶりに山焼きが行われました。雲月山は広島県北部北広島町の北部、島根県との県境に位置する標高912mの山です。西中国山地国定公園の中でも珍しい草地の山で、草地でしか見ることができない植物が多く見られます。その希少な植物を守り続けていたのは、地域住民が続けていた山焼きです。ススキやササ、堆積した枯れ草を焼き払うことで、草の生育を促していたのです。芸北地区は昔から馬の産地であり、雲月山でも軍馬の生産が行われていました。また、昭和初期にはこの文化ホールが建っているあたりに大仙原競馬場もありました。

日本全体を見てみても、草原がどんどん無くなっているのですが、過疎化が進む地域住民だけでは山焼きを行うことができないので、今回は広島市内などからボランティアに来ていただきました。中には、若い頃、雲月山に登ったことがある人もおられました。

今回は、全体の5分の1に当たる8haを焼きました。8:30には全員が集合し、9:00から行われたのは防火帯を作る草刈りです。山焼きの経験を持つ地域住民の指示に従って、

全員で草刈りをして、刈った草を除去しました。その後、12:30分に点火をしました。火はふもとから点火すると一度に燃え上がって危険なので、頂上から点火しました。火が入った後は、燃え広がらないように全員で火の監視をします。防火帯に立って、枝打ちしたヒノキの枝で火を消しました。3～4割山が燃えた時点で、ふもとからも点火して、火をぶつけ合って鎮火させます。点火からおよそ2時間で予定していた範囲が燃え、山全体が黒い焼け野原になりました。この灰に含まれるリンやカリウムは、花を咲かせる栄養になります。

今年の秋に雲月山を歩いたとき、いくつかの植物を観察しました。マツムシソウは、以前は登山道沿いに多かったのですが、今年は山焼きをしたところに群生していました。山焼きを続ければ増えていくのではないかと思います。ウメバチソウも、今年は増えたように思います。以前はほんの一部にしか見られなかったのに、今年は山焼きをしたところを中心に、たくさん咲いていました。オキナグサは昔は芸北のどこにでもあったそうです。今、雲月山で見えることはできませんが、山焼きを続けていくうちに雲月山にも増えたらいいな、と考えています。

ボランティアとして参加した人からは「火の美しさ、怖さを体験し、感動した」「火の燃える音や匂いに感動した」「広島県だけで

なく、他県のような年齢層、様々な属性の人に参加してもらって、一緒に守っていきたい」という声が聞かれました。また、当日は、地元の雲月小学校も山焼きを見学するために雲月山を訪れました。児童たちは間近に山焼きを見ることで、山焼きの大切さや炎の怖さを知ったようです。「下から火をつけたときにすごい速さで燃え上がる様子がすごかった」「雲月山のことをいろいろと勉強して、いろいろなヒトに雲月山は良いところだと教えたい」などの感想が聞かれました。雲月地区は過疎化が進んでいる地区なので、余所に出ている若い人にもこのような機会に帰ってきてもらって、取り組みに参加してもらいながら、ふる里の良いところを再認識してほしいと思います。

一回山を焼いて、それで済むというのではなく、来年からも継続的に焼いていかなければなりません。雲月山は広島県にとって非常に重要な財産ですから、これからも様々な人たちの力をお借りしながら、雲月山の草原を守っていきたいと思います。

山焼き後の雲月山



大仙原競馬場



千町原の保全を目指して

八幡高原ふるさと推進協議会 会長
川内信忠



八幡高原ふるさと推進協議会では、カキツバタの里づくり実行委員会を設立して2001年から活動をはじめ、現在第2期の事業を完了しようとしています。昭和の中頃までは、八幡のあちこちでカキツバタの群落を見ることができました。その様子は、昭和8年と昭和12年の2回にわたり八幡高原を訪れた牧野富太郎博士によって記録されています。博士の日記の中には、八幡高原で見た一面のカキツバタ群落に感激したことが記されており、いくつかの俳句を残しています。その一つ「衣にすりし 昔の色か 燕子花」の句は石碑に刻まれ、1999年6月に千町原に設置されました。石碑の建立の他にも、カキツバタの里づくり実行委員会では、フォーラムや燕子花まつりなどを開催していますが、その中心になるのは、休耕田を活用したカキツバタ栽培です。

牧野博士が見たはずのカキツバタの群生している湿原は、河川改修工事や圃場整備によって田畑に改良され、今では見ることは出来なくなりました。また、そのように改良された田畑も、昨今は休耕田として再び荒地になりつつあります。この休耕田にカキツバタを植え、牧野博士が感激された満開のカキツバタを再現して、八幡高原をカキツバタの里にしたいというのが

カキツバタ栽培のきっかけです。この取り組みには、地域内外から多くの方が参加し、植え付けから草刈りなどの手入れまでボランティアによる作業を行っています。こうして、カキツバタの里がつくられ、カキツバタの咲く風景はよみがえりました。

しかし、この数十年の間に八幡から失われたものはカキツバタだけではありません。

昭和のはじめ頃、ほとんどの農家にはウシがいました。ニワトリもいたしヤギもいました。冬期間の飼料として草刈りを行って、乾かして持って帰って、その一部をダヤに敷き詰めていました。それを定期的に取り出して堆肥にして田んぼや畑に還元していました。当時はそうしたひとつの輪ができていたと思います。昭和30年を過ぎた頃、初めて耕耘機が入ってきました。田畑を速く耕してくれるので、「こりゃあ便利なもの」と思いました。そうすることによって、今まで必要としていた農耕馬が要らなくなってきた。と同時に草も刈らなくなりました。科学が発達して化学肥料がでてきてから草も要らなくなりました。同時にエネルギーの方も薪や木炭から電気・ガスなどに変化しました。そうして、各家がほとんど山のように積み上げていた薪が要らなくなりました。サイクルとして山で伐られていた木も要らなくなったのです。

今思うと、草刈りのあと咲いていたササユリとかいろんな山野草を、今、見なくなりました。ブルーベリーに近縁のナツハゼ（かっちこ）な

カキツバタの植え付け作業



ど、草原には良いものがたくさんあったのですが、今は八幡地区から失われてきました。それくらい八幡の自然は変わってしまいました。

明日（11月20日）草刈りをする千町原も、昭和初期にはマツムシソウが咲き乱れる草原でした。その後、千町原は陸軍に接収され、戦後には開拓団が入植しました。この開拓団も長くは続かずに、1960年代には広島県が大規模改良草地として開発しています。それも長くは続かず、1980年代には牧場が閉鎖されました。その後は自然公園として利用されて現在に至っています。ところが、牧野にするときに排水路を掘ったり、草刈りをしなくなったために、今ではどんどん樹木が侵入しています。このままでは、千町原は百町原になり、いずれは森になってしまいます。そこで、昨年（2004年）11月23日に、ボランティアを募って千町原の草刈りを行いました。

この草刈り作業には、子どもから若者、お年寄りまで、様々な年齢の人が集まり、地元の者も参加しました。いろいろな人が集まることにより、交流が生まれ、地元の参加者やボランティアからは「楽しかった」という声が聞かれました。

それから、刈った草は地元の農家に持って帰っていただき、堆肥にして使ってもらいました。明日の作業の時には、その堆肥を使って作った野菜も食べていただく予定です。伐採した樹木については、去年の作業では放置したまま

だったのですが、今年は積極的に利用しようと思っています。ナメコのほだ木や薪にするほか、そうした利用ができない小枝についてはチップパーを使ってチップにし、堆肥にしていく予定です。こうした取り組みを続けければ、いずれは有機栽培野菜としてブランド化できるのではないか、と考えています。

また、同じ千町原の二川キャンプ場近くでは、広島県と環境省による自然再生事業が始まりました。これは、牧野開発によって失われた湿原帯を復元させるための動きで、2006年度に設計、2007年度からは施行が開始される予定です。草原管理の活動が広がって、いつかは千町原全体が大きな草地に戻っていけば良いと考えています。

地域とボランティアが一緒になった草原での刈り取りが、地域活性に結びつけば良いと思っています。かきつばたの里づくり、千町原の草刈り、自然再生事業など、千町原一帯が見晴らしの良い環境になり、そこに人々が集うようになればうれしいことです。

かつての千町原の風景



千町原の草刈り



参加者によるグループ座談会

草地は人が関わらないと維持できない生態系である。一方、芸北地域は急速な過疎化が進んでいる地域である。ここで、人口というものについて考えてみると、芸北地域に住んでいる人は、当然一週間芸北地域にいる。また中には、籍は芸北地域にあるが週末に帰ってくるだけ、という人もいる。逆に、芸北地域の人ではないが、毎週のように通ってくる人もいる。あるいは、別荘を持って、第二の人生の多くの時間を芸北地域で送っている人もいるかもしれない。こうした人の人口比を仮想的に考えてみると、週末には在籍者の流出と地域外からの流入が同時に生じるため、余所からの来訪者の割合というのは、決して低くないのではないだろうか。これからの地域社会を考える上で、芸北地域における地域外住民の存在を無視することはできなくなっている。芸北地域に住む者も、そこを訪れる者も、旅行として訪れている人がその場所に対して責任を持って関わって行く「レスポンシブル・ツーリズム（Responsible Tourism：責任を伴う観光）」について考える必要がある。

現在、八幡の若い世代からは、これからの地域づくりはそこに実際に住んでいる人達だけでなく、毎週のように訪れる人や関心のある人の意見も積極的に取り入れていくべきではないか、ということを提案している。その一環として、概念的な町としての「八幡」を提唱し、その象徴としてのマークを実際に使用している。こうしたコミュニティは今の行政の仕組みにはあてはまらないが、概念的なものとして成立するのではないかと考えている。



このマークは、いわば概念的な町としての八幡町章のようなものである。

本シンポジウムでは、以上のような考えから、地域住民・地域外住民を問わず、今後の草地管理について来場者の意見を交換するための座談会を設けた。座談会は5つのグループに分かれて行い、各グループが用意された10のテーマ（表1）のうち適当なものを選択して議論をした上で、その結果を発表した。時間的な制約から、全体的なまとめには至らなかったが、以下に、各グループ内で出された意見を列記する。

表1 グループ座談会のテーマ

1. ますます過疎化が進む今後も、芸北の草地は残していくべきでしょうか？それはなぜですか？
2. 草地の魅力はどんなところでしょうか？野草や鳥以外にもありますか？
3. 「草地」を身近なものにするために、なにか良い呼び名、愛称は無いでしょうか？
4. 雲月山の草原をどのように活用できるでしょうか？また、その時の問題点や解決法は？
5. 山焼きを続けていくためにはどのようなことが必要でしょうか？
6. 千町原の草原をどのように活用できるでしょうか？また、その時の問題点や解決法は？
7. 千町原の維持作業を続けていくにはどのようなことが必要でしょうか？
8. これから、草地への関心を高めるために、どのようなことができるでしょうか？
9. 草地に関して、シンポジウムで話題にならなかったことで、どのようなことがあるでしょうか？
10. その他、自由な議論があれば記録してください。

テーマ1

「ますます過疎化が進む今後も、芸北の草地は残していくべきでしょうか？それはなぜですか？」

1班のまとめ

雲月は昔から使われていたものなので、今の方向性を追求してそのまま残すべきだ。一方、千町原は畜産によって改良されたものであり、そこで遷移が進んでいる。残していくべきか、もとに戻すかどうか、議論の余地がある。ただし、そもそも改良草地として利用するのに無理があった場所なので、再生事業の場所を含め、もっと広い範囲で、どのような形にし、どう活用するかを考える必要がある。その場合、改良草地にする以前の状態を考慮する必要がある。芸北地域では、人との調和のとれた風景が草地であり、写真を趣味にする者にとっては魅力的な景観である。草地の保全は文化的財産の保全・向上と同じことであり、今後も残すべきである。

2班のまとめ

一番のネックである過疎化による人不足を解消するためには、特に地域の子供たちに小さい頃から山焼きなどの体験をさせて“遺伝子に焼き付ける”ことが重要であろう。芸北の草地という魅力ある自然を保全し、活用し、当たり前前の自然を再認識することで、人を草地に呼び込むことができる。そのとき、例えば人やお金が足りないなど、地域だけでは困難なことも多い



ので、都市部からの援助が必要である。そのとき、例えば人やお金が足りないなど、地域だけでは困難なことも多いので、都市部からの援助が必要になる。援助を受ける方法としてマスコミなども使って宣伝することや、資金を集めるためのグリーンツーリズムの取り組みも視野に入れる必要がある。草地の管理方法を知っている人がいる今ならば、そうしたことも可能である。

テーマ2

「草地の魅力はどんなところでしょうか？野草や鳥以外にもありますか？」

1班のまとめ

草地では、気持ちが良い、心地よい、安心感、開放的などのことを感じる。この景観こそが価値であり、草地がもたらす感覚は潜在的なものではないだろうか。森林は不安感があるのと対照的に、草地では気分が落ち着くので、子どもや若い人にも訪れてほしい。一方、生物多様性を考える上で、非常に重要な生態系である。強い者を除くことで、弱い者も生き残る中規模攪乱説は、草地で見ることができる。



テーマ6

「千町原の草原をどのように活用できるでしょうか？また、その時の問題点や解決法は？」

4班のまとめ

地域の財産だということを地域住民が認識する必要がある。そのために、価値があるのに注目されてない植物など、今あるものの価値を見なおす必要がある。現段階では、草地の価値認識が共有できていないので、大人たちに訴えるのは難しい。しかし、定期的にシンポジウムを行ってゆくなどして、地元住民が気がつかなかった草地の価値を示していくことが必要である。また、長期的にはが子供達の環境教育が必須かつ有効であると思われる。今、学校教育などを通じて伝えていくことで、将来は若い人の参加を促進することにつながる。

そうすることによって、将来は草地を観光資源として利用できるのではないだろうか。ただし、観光客を集めるためにはイベントやリピーターを作る仕掛け作り、ガイドの育成、観察してゆく場としての整備など、解決すべき課題も多くある。また、草地は利用されて作られた生態系なので、目標植生を設定することにより、地元の人に堆肥にしてもらうなど、利用法が見えてくるのではないだろうか。その際、自然再生の名のもとに破壊が起きないように注意しなければならない。さらに、継続的に利用していくためには、地元のメリットを明らかにすることや、活動への参加を希望する多様な主体を巻



き込んでゆくことが必要である。

都市部の住民の立場からは、協力してゆく人の組織化や年間計画を作成、周到なPR活動に加え、草地シンポジウムのように地域住民とともに集まる機会を定期的に設けていただきたい。そうすることにより、地元と都市域住民との関係が作られ、観光客的な考えから責任ある関わり方へと転換するレスポンシブル・ツーリズムを実現できるのではないだろうか。その上で、地域住民だけでなく、ボランティアなどの積極的に芸北に関わる人たちまでを含めて、再度「芸北」という地域コミュニティを定義し直すことが望まれる。

テーマ8

「これから、草地への関心を高めるために、どのようなことができるでしょうか？」

5班のまとめ

草地に関心が無くなったのは、草地の必要性や利用価値が無くなったからであり、草地への関心を高めるためには、草地の利用価値を高める必要がある。そのためには、草原をバイオマス（生物資源）の生産場所として捉え直し、それを活かす方法を考えなければならない。また、将来も永続的に草地を残していくためには、子ども達に草原の価値を伝えていく「人作り」が重要である。子どもは自然に関心を持っているのだから、大人の方が草原の価値を認識し、少しずつでもそれを伝えなければならない。その



方法として、茅葺きの屋根を復元するなどして、視覚的に訴えることも必要である。

テーマ 10

「その他、自由な議論があれば記録してください。」

3班での発問

山麓庵のかやぶき屋根を将来しきかえられるように、数年前から毎年地元の人でカヤ刈りをしている。葺き替え用のカヤを調達するための予算があるため、これまでは、地元の方が買ったカヤ1束あたりに値段をつけて買い取るという形式で作業をしていた。しかし、作業をしている地元の方たちが70歳以上と高齢になり、今年はカヤ刈りができなかった。カヤは将来的に必要なものなので、今後も続けたいが、良い方法は無いだろうか。

3班のまとめ

カヤを調達する作業にボランティアを募って作業すれば、一束あたりの値段を安くでき、予算を有効利用できる。作業に対する代価を下げることで長期間続けられるし、都市部の住民が意識して参加することが大切だ。現在、大勢の人が八幡を訪れるということは、自然への価値が十分にあるということだ。しかし、今はその価値に対して町の人たちが対価を負担する仕組みがない。ボランティアとしての参加は、対価を労働で支払うという一つの仕組みである。



都市部から八幡に人が訪れるのは魅力があるからであり、ボランティアとしても多くの人があるが、地元の人たちとの交流は少ない。都市部住民としては、せっかく来るなら、地元の人たちと協力して自然を守りたい。また、カヤを刈るのは誰でもできるが、茅葺きに使えるように束ねるには地元の方の技術が必要になる。これは、地元の人をこのような活動に呼び込むいきっかけになるのではないかと。

一方で、何か教えてもらうとか協力が必要な時に地元の人に来ていただくのはいいが、全部の行事に参加しなければならないというような雰囲気になってしまうと、地元の人たちは自分たちの生活のリズムを崩されて、地元に無理が来る。草抜きや自分の畑の管理など、日常の作業も大変なので、ボランティアができることと地域住民の力が必要なことを整理して、互いに無理のない協同の形を作る必要がある。

また、都市からのボランティアにばかり頼ってしまうと、週末以外は超過疎の村になってしまう。若者が戻って来られないのは、地元ではお金を得ることができないからであり、新しい形のビジネスより、若い人たちを呼び戻さない、草地の利用も含め、集落は存続できない。



シンポジウムへの参加状況とアンケートの結果

シンポジウム参加者 86 人のうち、24%に当たる 21 人が芸北地域からの参加者だった。芸北地域外からの参加者 64 人のうち、県外から 4 人の参加者があった。また、参加者のうち 36 人は、過去に千町原の保全作業や雲月山の山焼きに参加していた。これらの参加者全てにアンケート用紙を配布し、45 通の回答を得た（回収率：52.3%）。以下が集計結果（図 1）および記入された全文である。

事前の案内について

「シンポジウムが固いと思われる。」「PR 不足。」
「芸北への呼びかけの工夫が必要。地元の参加者が少ない。」「区毎へのチラシ配布などでの周知。」「住民にチラシ配布のみで、周知できなかった。」「山焼き参加者へのダイレクトメールは効果的と思う。」「学校・公民館に案内を。」「目的を詳しく説明してあった。」「ネットで上手く出てこなかった。」「地元の参加が少なく、固定化している。」「場所がわかりにくかった。HPでもしっかり案内・宣伝してほしい。」「登山などのイベントでビラを配っていた。」

当日の受付について

「ネームプレートが良い。」「明るい対応。」「遅れて柳崎さんに怒られました。ごめんなさい。」
「1人で忙しそうでした。」「テキパキと運営。」「名札が良い。」「はがきが良かった。マークの説明と一っしょになっているのがいい。」「名札が作製されており、感激。」

講演の内容について

「様々な話が聞けた。座談会(分科会)が良かったが、もう少し時間が欲しかった。」「勉強になりました。」「初回であり、今後の方向付けがあったから。」「詰め込みすぎという感じがした。1つの講演をもう少し長くした方が良いのでは？数を減らして。」「歴史的な内容も、もう少し知りたい。」「高橋先生の講演は学ぶことが多かったです。」「総論、各論とも具体的。ためになった。」「各分野で専門的に話して欲しい。」「分かりやすかった。」「地元の方の話が聞けて良かった。」「草地とどのように関わってきたか、草地に暮らす生物などを知った。」

座談会について

「皆さんの意見が出て良かった。」「座長の話が長かった。」「もっとテーマを絞った方が、短い座談会の場合は無理が無かったのでは。」「意見交換ができたこと。」「時間が足りなかった。(14)」「時間が短い。同じテーマを一つ設定して、班毎に違う意見を聞き比べるのも良かったかも。」「やり方がうまかった。」「初めての出会い

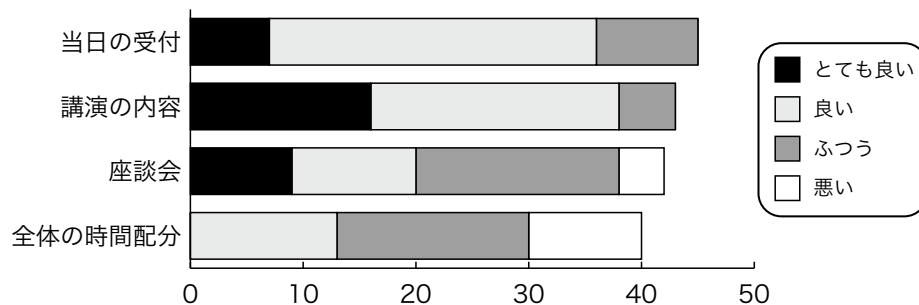


図 1 参加者によるシンポジウムの評価 (n=45)

いにかかわらず、和気藹々、活発な発言が多かった。」「座談会そのものはとても良かった。」「テーマは包括的なもの一つでいい。10個もあってかえて混乱した。リーダーとの前打ち合わせをもう少し。」「座談会の時間が足りなかった。もっと話したかった。」「何しろ時間がなかったですね。それに付きます。でも、一方通行でなく、一言でも喋る場が持てたことは良かったです。自己紹介でどんな人が来ているか分かっただけでも意味ありと思いました。」「この「座談会をする」という案自体が良いと思った。」「環」になれたと思う。しかし、発言者が偏ったところがあった。地元の人からもっと意見を聞きたいと思った。」「時間が不足したところは良くないが、内容が少しずつ煮詰まってきた。」

全体の時間配分について

「聞く時間が長く、話し合いの時間が短かった。」「講演の数を減らしてもっとゆとりのあるタイムスケジュールの方が良いと思う。」「講演の時間を削って、座談会を長くしたらどうか。」「シンポが不足。」「プログラム通りに時間が進まなかった点です。」「一般講演は草地中心に各位の方が、時間的に良いと思う。」「座談会の時間を長くして欲しい。(6)」「座談会をより充実させる工夫が必要。」「講演時間が短く感じる時があった。」

全体を通して良かった点（地域からの意見）

「草地の差認識。子どもの体験の重要性。提案・報告者は大変よかった。地元の人間の学者が大変大切であると再認識。」「このような座談会を何度も聞いてほしい。」「講師の先生方によって、より専門的に草地の事が理解できました。また、地元の有志の方の強いメッセージが伝わってきました。」「地元に住んでいて知らないことを多数教えてもらったように思います。」「多面的な話が伺えて、一歩立ち止まれて良かった。」

全体を通して良かった点（地域外からの意見）

「講演者の数が多く、いろんな話を聞くことができた。」「町外の人が多かったので、地元の話の聞いてもらえて良かった。高橋先生の話は芸北の人に聞いてもらいたかった。地元の人が草地についての価値とかに気付かないと、こういう催しをしてもなかなか人が集まらないかなーと思う。」「草地を経済的に活用する方策のヒントを得ることができた。」「座談会でグループ分けで小さなグループにしたのが良かった。」「様々な意見が聞けて良かった。」「地元の人と直接お話が出来てよかった。」「座談会のやり方が良かった。」「シンポジウムが良かった。6、7への意見が多いのが良かった。」「高橋先生の話で、草地を全体的に知ることができた。」「とても暖かみのある構成で良かった。」「草原の生態的な重要性が改めて認識できた。」「地元の講師を採用したところ。アットホーム。」「座談会があって良い。(3)」「とにかく面白かった。」「座談会のテーマは1時間でまとまるものではないが、シンポジウムが一方通行でなく、参加者が発表する場を作った点。」「情報を得ることができた。」「様々な意見があることが分かった。」「事前準備等なされ、気持ちよく入れた。」「講演・座談会と、色々な人のお話を聞けて良かったと思いました。」

改善点（地域からの意見）

「座談会の時間をしっかり取る。(2)」「司会の話の短く！」「総合的にまとまっていて楽しかった。」「もっと若い人（学生さんとか）にも呼びかけて、参加するようにしては？」

改善点（地域外からの意見）

「地元の人を集めようと思うなら、平日の夜でないかと来づらいのでは？兼業農家は土・日に作業するし。タイトルが「シンポジウム」だと、専門的な講演と思われ、敷居が高い

感じがして地元の人は「行こうかな」と思わないのかな、と考えた。地元の意識高揚が課題かな？町外から来る人はそもそも関心の高い人だと思ふし。経済効果が見えないとだめなのか？地元？」「座談会をもっと長く。」「むつかしくならないように。学術的な内容は減らして、地元と一緒に出来ることを考える時間をもっと長く。」「なし。」「都市と地元の人で小さなテーマで10人くらいで対話しては！」「時間が押したことはよろしくない。時間どおりとしていただきたい。(3)」「地元の人に聞いてもらえる仕組みを考えなければ。子どもも参加できるシンポジウムはできないか。」「専門分野に分かれて時間を取りたい。」「朝からやりましょう。」「草地シンポジウムを持つに至ったやむにやまれぬ思いとか、熱とかがはじめに胸に響いてこなかったので集中できにくかった。各講師がなぜ選ばれたかはっきり実感できる紹介やプログラム表示があるとよかったかも。」「地元の人にアピールするシステムを作りたい。」

地域からのメッセージ

「地元外の人には地元の事情を知らず要求する面がある。ぜひボランティアとして地元を力に借りたい。地元は人手不足です。」「参加者のみなさん、草花を持ち帰る人を見かけたら、ぜひ注意を一言かけてください。」「魅力ある芸北にしたいと思います。そのために知恵と力をお借りしたいです！」「これからもどんどん地元からメッセージを発動していきたいので、しっかり受け止めて、興味があれば是非芸北へお越し下さい。」「友人、ご近所に「芸北いいよー」と言いまくって、周りを巻き込み遊びに来てね。」

地域へのメッセージ

「地元の友人・知人に地元の自然の良さを広めてください。」「交流する機会を増やしたい。」「ほれ込んだ土地です。仲間に入れて下さい。次

世代にも見せてあげたい。」「市内の人は、手伝いたい思いもあります。初めての人でも出来ることを教えて下さい。」「地元の意見を・・・。」「都市がボランティアとして人、労力を活用することを大いに取り組み、その中で地元での起業可能性を探ってもらいたい。」「あなたも芸北の人になりませんか！。」「草地の利用価値と魅力は分けて考える必要があると思う。」「地元の良さをしっかりと認識し、地域の宝として情報発信しながら、主体的に取り組んで欲しい。」「地元の方の中にも、このようなシンポを機に世代間のつながりを持って欲しい。」「芸北地区の人には引き続き生活を続けながら自然を守って下さい。」「もっともっと地元の方といろんな話がしたいです。昔の芸北のことを教えてほしいです。」「芸北はガンバッテいらっしやる。しっかり！！」「地元の人々の写真による、芸北の自然の展示会を開いてはどうか（すぐれたものである必要はない）？農産物、作品もふくめて、千町原あたりで野外博物館をひらいてはどうか？」「いろんな会やイベントで、ごく一部の方でしょうが、少しずつ出会っています。その分芸北の魅力が増えています。」「ボランティア計画など、PR等で知らせて欲しい。」「貴重な財産が身の回りにあることに気付いて欲しい。」「地元の方（宮本氏、川内氏）の話はとても感動的でした。どこに行っても学者のみが自己満足の世界で話されるばかりで、うんざりでした。地元の方が地元の資源に誇りを持って話されるって、見てうれしい限りです。」

その他のコメント

「継続するのが良い。地元の人をどう集めるか。」「事務局のみなさん、大変ご心配でした。(2)」「段取り、準備、実施とお疲れさまでした。春から秋にかけて、一通り草地関連の行事が終わりましたね。ほんとうにお疲れさまでした。」「難しくならないように。地元の問題を分かりや

すく。」「本当にご苦労様です。今後もよろしく
お願いいたします。」「あきらめずに地元にも働
きかけて欲しい。」「良い企画であった。」「年数
回開く方が良い。」「地元にお金を落とすなら
かのシステムができれば、地元の関心も高まる
のではないかと思います。そうすれば地元若
者も残れる道ができるかも。」「とても流れがス
ムーズで感心しました。全国草原サミットの内
容よりずっと充実していました。この様なシン

ポを数回経ていけば、第8回を受ける実力は十
分付いてると思います。」「地元の人が”自分
を公表できる場”をつくり、地元を取り込むこ
とが出来ると思う。」「パソコンによる表示はとも
工夫されセンス良かったです。地元の人が来よ
うと思われるには、ネーミングが難しかったか
な。八幡弁(?)の呼びかけでは?」「勉強にな
りました。」

千町原の草刈り作業への参加状況とアンケートの結果

草刈り作業参加者 65 人のうち、15.4%に当たる 10 人が芸北地域からの参加者だった。芸北地域外からの参加者 55 人のうち、県外から 6 人の参加者があった。また、参加者のうち 35 人は、過去に千町原の保全作業や雲月山の山焼きに参加していた。これらの参加者全てにアンケート用紙を配布し、48 通の回答を得た（回収率：73.8%）。以下が集計結果および記入された全文である。

事前の案内について

「新聞など。」「草地シンポジウムにあった案内
で来たので、詳しいタイムスケジュールがわか
らずに参加してしまった。」「チラシ・ポスター・
マスクミ PR があった。」「計画をたてやすい。」

当日の受付について

「お姉様方の笑顔がいいっす。」

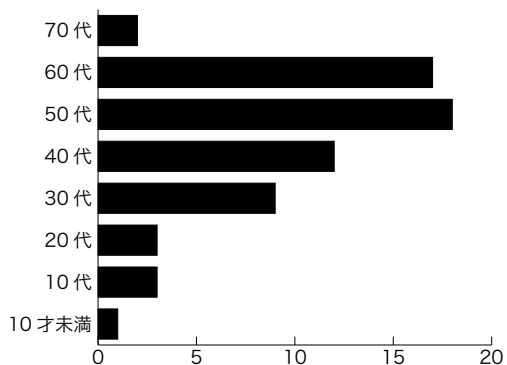


図2 参加者の年齢構成 (n=65)

昼食の量について

「豚汁おいしかった。多かった。」「たいへん
おいしかった。量もたっぷり。」「今まで参加し
た中で最高のごちそうでした。」「あたたかいも
のがうれしかった。」「おみそ汁も弁当もおいし
かった。」「言うことなし。」

昼食の内容について

「おいしい。」「豚汁が最高でした」「申し分な
い。」「前回よりあめやコーヒー、お茶などもあ
り、色々バラエティに富んでよかった。」「十分
に食べました。おいしかったです。」「量が多かっ
た。」「最高に美味。」「みんなでワイワイおいし
くいただきました。質・量とも十分でした。」「豚
汁がとてもおいしかったです。ありがとうございました。」「おかずの種類も多く、良い。」

参加費について

「保険料と食事代くらい徴収した方がいい。地
元の方はそれでなくてもご接待モードだから。」
「500 円で保険も掛けて頂いた上に飲み物・食

べ物まで十分に用意して頂き、健康的な1日が過ごせたので。」「保険も含めて500円は安い。」「もう少し出してもよい。(4)」「500円でこの待遇は安い。」「500円で大幅な赤字でなければ本日の500円は適当。」

作業内容について

「カメラマンしつつ、最後は草運びもできたので、有意義だった。」「初めてなので判りませんが、役割分担がよかったです。」「休憩も適当に取られ。」「ちょっとキツイ。」

作業量について

「結果的に放置されている(時間的に回収できなかった)ススキの山を見ると、人数の割には多かったのか?」「もう少しやっても良かった。(2)」「無理せず参加できるのでうれしい。」「午後からは少し疲れたので、休みながら作業しました。」「自分に合った量の作業をしている。」

良かった点(八幡地域から)

「昼食、作業そのもの。」「仕上げがある。」「都会のボランティアの力のすごさ。」

良かった点(八幡地域外から)

「参加する人が皆積極的に行動していたのでよかった。中学生ぐらいの子が参加していたの

は頼もしい。」「交流。」「特記事項なし」「チップパーが良かった。昼食が美味しかった。」「町民の人と湿地・草地を作る考え方。」「みんなで汗を流して、ガンバッテ、秋の一日快適でした。お昼もおいしく幸せでした。」「昨年よりずいぶん行き届いた準備がされていましたね。何よりお天気に恵まれ、回を重ねるごとに少しずつ積み重なるもの(作業・人の出会い)が実感できました。」「心地よい汗が出た。」「わきあいあい。」「地域の方々とふれあえた。」「段取り良く出来た。沢山の人と一緒に作業できた事。」「数の力。和気藹々。」「気負わずに作業が出来たことがよかった。」「地元の人と作業ができたこと。」「笑顔が良い。」「安全対策が万全になされた。」「みんなで同じ考えの人が集まってワイワイ楽しく仕事ができました。」「昼ご飯がおいしかった。」「八幡の方々とボランティアの間が近くなって来てる。」「天候が良かった!気持ちがすっきりした!」「知らない人と色々話せてよかった。」「各班にリーダーを1人置くべきだ。」「時間が守られた。」

改善点

「休憩に入る合図は音(?),呼び声(?).サイレンまではいかなくても、そういったでかい音の方がいいかも?」「スタートを早く、注意事項は受付時に配布。」「トイレ。」「特になし。(3)」

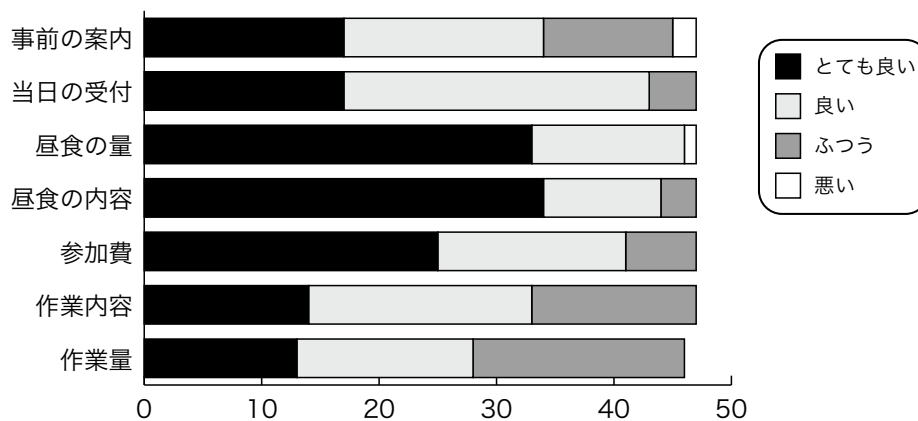


図3 参加者による千町原の保全作業の評価 (n=48)

「呼子を使用してもらいたい。」「木の切り方、方向。」「くま手等の道具がもっとあれば。(2)」「PR活動をもっと、市内在住からの参加も多いと良い。」「もっと広報方法を改善した方がよい。」「長靴を準備するように伝えて欲しい。(準備の内容が不十分)」

八幡地域からのメッセージ

「来年もずっと参加してください。」「来年もお会いしましょう。」

八幡地域へのメッセージ

「年3～4回実行してほしい。」「また遊びに来ます。」「今後とも多数参加していただいて、いろいろ話を聞いて、教えて欲しい。」「環境が良いのでますます自然を大切に。八幡に来られた皆に安らぎを与えてください。」「お疲れさまでした。(2)」「来年もガンバリましょう。」「八幡の食材、ごちそうさまでした。」「いつもお世話になっております。」「美しい景色と環境をこれからも大切にしてください。」「毎年よろしくお願いします。」「人が入れる草原を作って欲しい。」「八幡の良さを互いに刺激していきませう。」「私達も草原を守ります。地元の方もよろしく。元気を出しましょう。」「おいしい食事ありがとうございました。」「このかけがえのない自然を大切にしたいと思います。」「自然っていいですね。」「今後も手を取り合って頑張りましょう。」「八幡の自然を大切に！」

その他メッセージ

「準備ご苦労様。楽しみました。」「きのう飲み過ぎました。」「ご苦労様でした。(3)」「楽しくなごやかな雰囲気でもよかった。」「お世話になりました。」「2日続きの企画準備、お疲れさまでした。たくさんの人、上天気よかったですね。」「カメラに向かってあるいは人に向かって笑顔で」の声かけはよかったですよ。カメラに向か

うと皆テレてしまうので。」「楽しく参加させてもらいありがとうございました。」「ありがとうございました。」「楽しくボランティア活動ができました。ありがとうございます。準備やなにか色々大変だったと思いますが、これからも続けて行って下さい。おつかれ様でした。」「これからも色々な事を考えて下さい。参加します。」「カミシバイ方式ミーティングがとてもよかったです。参考にします。」「楽しかったです。ありがとうございました。」「良くなる一方です。」「ご苦労様でした！来年も元気であれば参加させていただきます。」「出来るだけ参加したいので、行事があれば連絡して欲しい。」「草原を維持していくのは大変ですね。」

謝 辞

アンケートにご協力頂いた参加者の皆様はこの場を借りてお礼申し上げます。また、本報告をまとめるにあたり、各講演者には講演要旨と資料を提供頂きました。高原の自然館スタッフの柳崎誠子氏には講演記録のテープ起こしをして頂きました。これらの皆様に感謝申し上げます。

2007年2月15日受付；2007年2月26日受理

- A : シンポジウム告知のチラシ (表)
- B : シンポジウム告知のチラシ (裏)
- C : 会場からの質問 2005 年 11 月 19 日
- D : 質問に答える中越教授 2005 年 11 月 19 日
- E : 懇親会で挨拶する八幡地区代表 2005 年 11 月 19 日
- F : 懇親会で供された八幡地区の郷土料理 2005 年 11 月 19 日


芸北 草地シンポジウム

Geihoku Grassland Symposium

草地がつなぐ人・文化・いのち

とき：2005年11月19日 13:00～ ところ：芸北文化ホール

主催：八幡高岡ふるさと推進協議会・豊月地区ふるさと推進協議会
 協力：西中国山地自然史研究会・豊月山活性化委員会・芸北観光協会・芸北文化ホール・高原の自然館



A

芸北 草地シンポジウム -草地がつなぐ人・文化・いのち-



わたしたちの活動がつなぐ



人・文化・いのち・・・

かつては全国土の1割以上の面積を占めていた草地が、今日ではわずか3%にまで減少しています。その背景には、農業の変化(牛馬からトラクターへ、たい肥から化学肥料へ)やエネルギーの変化(薪から石油燃料へ)があります。こうした人間活動の変化によって失われた草地では、住みかを奪われた動植物に異変が現れています。広島県の中でも比較的まとまった草地が残る芸北で、草地をめぐる文化や生物について考えてみませんか?

日時：2005年11月19日(土) 13:00～17:00
 場所：芸北町民文化ホール
 参加費：無料(事前にお申し込ください)

——— スケジュール ———

13:00 開会
 13:10 基調講演
 「芸北の自然と人の関わり」
 中越信和(広島大学教授)

13:50 一般講演
 「芸北の草地に生きる鳥類」
 土野吉雄(広島県立安芸南平校 教諭)
 「草原の再生—資金から活用へ—」
 森橋壮幸(近畿中国四国農業研究センター 主任研究員)

14:30 特別講演
 「豊月山の山焼き」
 宮本邦之(豊月山活性化委員会 事務局長、北広島町議会議員)

15:00 特別講演
 「千町原の保全を目指して」
 川内信也(八幡高岡ふるさと推進協議会 会長)

16:00 グループ座談会
 17:00 閉会
 18:00 地域住民・講師と語り合う懇親会
 参加費：3,000円
 会場：八幡高岡センター
 懇親会は11月19日までに申し込ください

日時：2005年11月20日 9:30～
 集合場所：高原の自然館
 参加費：500円(保険代・飲み物・昼食代です)
 シンポジウムに関連して、地域の住民とボランティアが一体になって千町原の草原維持作業を行います。こちらにもぜひご参加ください。どなたでもご参加いただけます。
 宿泊をご希望の方には民宿も割引価格でご案内します。

お問い合わせ・お申し込み
B 芸北 高原の自然館
 〒739-0202 広島県八幡高岡町千町原1-1-1
 TEL FAX 0826-36-2008 <http://shigen.kanai.or.jp/>
 email: shigen@kanai.or.jp

芸北 草地シンポジウム -草地がつなぐ人・文化・いのち-
 主催：八幡高岡ふるさと推進協議会・豊月地区ふるさと推進協議会
 協力：西中国山地自然史研究会・芸北観光協会・芸北文化ホール・高原の自然館



図 版 2

A：千町原の草刈り作業，受付の様子	2005年11月20日
B：作業前に挨拶する川内会長	2005年11月20日
C：保全地への移動	2005年11月20日
D：草刈りと刈草整理の様子	2005年11月20日
E：昼食の配布	2005年11月20日
F：チップパーによる伐採木の粉砕	2005年11月20日
G：伐採木の運搬作業	2005年11月20日
H：ナメコのほだ木にするハンノキと作業参加者	2005年11月20日

図版 2

